Works of Japanese Juvenile Art at the Time of the Pacific War (29) : Articles from the Shokokumin Shimbun (17)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊木, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6983

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第五十三号、令和三（二〇二一）年三月

「戦時下における児童文化」について（その二九）

―「少國民新聞」（東京）における読者投稿作品の位相と展開（一七）―

熊木　哲

【キーワード】　戦時下、児童文化、少國民新聞、短歌、昭和十八年

本稿では、「少國民新聞」（東京）に掲載された、昭和十八年（一九四三）の「短歌」を四半期毎に検討する。引用に際しては、原則として、旧字体を新字体に改め、改行も、適宜、改めた。前稿同様、作者については、国民学校の在籍校名・在学年・性別を記すにとどめた。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示す。

なお、昭和十八年一月一日から、東京日日新聞社は毎日新聞社に社名変更となり、「少國民新聞」（東日版）も「少國民新聞」（東京）となったことは前稿にも記しておいた。

また、この年、七月一日から、東京府と東京市を統合して、東京都となったが、この年の作品掲載の概括に際しては東京都とし、作品討に際しては、六月三十日までは「東京府」「東京市」、七月一日以後は「東京都」と、掲載時の表記に依った。

一　昭和十八年の「短歌」作品の展開

昭和十八年の検討対象は、一月一日（金・第一九五二号）から十二月三十日（木・第二二六二号）までの三〇七日分。

昭和十八年の「短歌」掲載作品は、読者が「投稿した作品」（以下「投稿作品」）と「少國民新聞」が募集し、特集として掲載した作品、つまり「企画された作品」（以下「企画作品」）の二種があるのは、「綴方」などと同様。

十八年の「短歌」は、「投稿作品」が三四一、「企画作品」が二二で、合計は三六三作品。

内訳は、第一四半期は「投稿作品」が七三、「企画作品」が四。第二四半期は「投稿作品」が一二三、「企画作品」が三。第三四半期は、「投稿作品」が七九、「企画作品」は〇。第四四半期は、「投稿作品」が六六。「企画作品」が一五。

昭和十八年に掲載された「投稿作品」三四一作品のうち、作品内容に「戦時下」の内容をもつ作品は一一八作品（約三四・六％）。

四半期ごとの内訳は、各四半期ごとの検討時に示す。

二　昭和十八年第一四半期の「短歌」

第一四半期（一月～三月）に掲載された「投稿作品」は七三首。この内、「戦時下」の内容をもつ作品は、次の三一首であり、掲載率は約四二・五％となる。

なお、第一四半期での「企画作品」の掲載は四作品。このうち「戦時下」の内容をもつ作品は二作品。

従って、第一四半期に掲載された総「短歌」七七作品のうち、「戦時下」色の見える作品は三三作品であり、掲載率は約四二・九％となる。

以下、「投稿作品」における「戦時下」の内容をもつ作品三一首を検討する。

1　地下足袋の配給うけた嬉しさに座敷の上でそつとはいてみる
（岩手県飯岡校高一男子、一月八日・金、第一九五七号）

2　朝の日のしづかに光る工場の裏庭に少年工手紙読みをり
（神奈川県藤沢市藤高校高二男子、同前）

3　君のため銃取る兄を思ひつつまなびの道にけふも励みぬ
（北海道霧多布校高一男子、同前）

4　日の丸を振りつつ子らは凱旋の兵士迎へに雪の道行く
（岩手県飯岡校高一男子、一月十三日・水、第一九六一号）

5　朝夕の臨時ニュースの大戦果文字にて見むと新聞を待つ
（福島県郡山市桃見台校高二男子、一月三十一日・日、第一九七七号）

6　銃をとる年には未だならねども重ね着せずにこの冬鍛へん
（静岡県小川校高二男子、二月五日・金、第一九八一号）

7　神風の伊勢の御神に我誓ひぬ死して守らん大和の国を
（神奈川県横浜市太田校六年男子、二月十日・水、第一九八五号）

8　大みいつ輝く今日の朝日こそ君が代祝ふ基なりけり
（栃木県足利市相生校六年女子、同前）

9　寒稽古勝ちぬく力きづくのだこれで米英倒すのだ
（静岡県森町校高一男子、同前）

10　光映ゆる探照灯に監視哨の望楼高く闇の中に浮く
（北海道札幌郡月寒校高二男子、同前）

11　君が代といつしょに昇る日の御旗朝日をあびてはたはたとなる
（青森県浦町校五年男子、二月十一日・木、第一九八六号）

12　陸海の戦果を友と語りつつ今日のよき日は忘れがたかり
（静岡県東川根校高一女子、同前）

13　ひるがへる日章旗の下に学ぶ我今朝のこころの清らけきかな
（北海道札幌郡月寒校高二男子、同前）

14　大君に仕へまつらんくにたみ我ら米英つぶす最後の日まで
（神奈川県横浜市大岡校六年男子、同前）

15　冬日さして国旗輝く朝の鐘空澄みわたるひかり嬉しき
（埼玉県藤沢校五年男子、同前）

16　空晴れてお堀はきよく松の木のみどりのかげに二重橋かな
（東京市墨田区出雲校四年男子、同前）

17　ひろびろと朝風になびく青麦に光かがやく聖戦の春
（福島県赤木校高二男子、二月十三日・土、第一九八八号）

18　ほの暗き灯の下顔よせて決意語りつ夜をふかしつる
（北海道札幌郡月寒校高二男子、同前）

19　たき木をば拾ひて帰る半島の婦人の白衣に流る夕月
（福島県好間第一校高二男子、二月十四日・日、第一九八九号）

20　神棚に向かうかしは手うつ心ほしがりません勝つまでは
（福島県宮本校高二男子、同前）

21　戦勝の幸を喜ぶ顔寄せてわが家のゐろりにぎはひにけり
（北海道間谷地校五年男子、二月二十四日・水、第一九九七号）

22　プロペラの音高く飛ぶ隼機朝日をあびて勇ましきかな
（神奈川県旭校高二男子、同前）

23 薩刀をかまへて並ぶ児童らに先生の気合するどくひびく
（山形県上ノ山校高一女子、同前）

24 弟と二人でむきし干柿は戦地慰問に今日送りたり
（在籍校・学年等記載なし、二月二十八日・日、第二〇〇一号）

25 霜の朝社頭の桜樹空高し誠心こめて長久祈る
（埼玉県藤沢校高一男子、同前）

26 空を飛ぶ飛行機みては南洋のソロモン島のいくさを思ふ
（東京市四谷第五校四年女子、三月十二日・金、第二〇一一号）

27 満洲にいつた友をば目に浮かべ今朝の寒さも何が何だと
（福島県宮本校高二男子、同前）

28 また多数馬の征くらしわが町に深夜を蹄鉄うてるが聞ゆ
（秋田県浅舞校高二男子、三月十七日・水、第二〇一五号）

29 登校時何もなかつた鍛冶屋の門帰宅に見れば入営の旗かな
（山形県宮内校高二男子、同前）

30 炭運ぶ行列長く続きけり我も旗ふり迎へんと思ふ
（山形県鶴岡市朝陽校高一女子、三月二十八日・日、第二〇二五号）

31 戦陣の兄の便りにこまごまと増産のことしたためてやる
（秋田県強首校高二男子、三月三十一日・水、第二〇二七号）

以上、三一作品のうち、第一〇・一三・一八の三作品は、北海道札幌郡月寒校高二男子の作品。以下、内容的に類似する作品ごとに検討する。

〈1、6、9、17、18、23、27、30〉

以上の八作品は、何れも、作者の体験による作品。

第一首は、地下足袋を配給で手に入れたということ。戦時下、国家総動員法第八条に基づいて、昭和十六年四月一日に公布施行された「生活必需物資統制令」によって、生活必需物資の生産と配給に関して、切符制による配給統制が実施され、「週報」二七〇号（昭和十六年十二月十日発行）に掲載された商工省「生活必需品読本⑭履物」によれば、農林漁業用その他一般用の地下足袋は、商工省が毎月各道府県に割当てをし、その数量を通知すると同時に地下足袋共販会社にも、販売を指示し、割当てを受けた各道府県は、割当てられた範囲内で購入票を作って、管下の市町村に交付し、各市町村は交付された購入票を農林漁業その他一般勤労者に交付し、交付された需要者が購入票と引換に小売商業組合（配給所）から購入することになっていた。

配給された地下足袋を「座敷の上でそつとはいてみ」たのは作者の児童であろうが、作者の児童が履くものが配給されたということであろうか。高等科一年生は一家の働き手であったということか。

第六首「冬鍛へん」、第九首「寒稽古」、第二三首「薩刀」、第二七首「今朝の寒さ」は、何れも寒さをものともせずに、との意気込み。第六首では寒さの中で銃を取って戦っている兵隊を思い、第九首では米英を倒すための、第二三首では女子児童の鍛錬であり、第二七首では満蒙開拓青少年義勇軍の友の寒さを思って寒さを耐えるとの決意である。

第六首「重ね着せずにこの冬鍛へん」とは、薄着で寒さに耐えるとのことであるが、この決意は、「みんな元気でうす着の早起き体操」の実践であり、この標語は、「少國民新聞」一月二十一日（木・一九六八号）の「けふから耐寒鍛錬だ」の見出しに添えられた副題であった。

記事には、「厚生省では、健民運動、耐寒心身鍛錬のための、色々な計画を発表」しているので、「大政翼賛会では、これを全国民に行きわたらせるため」、二十一日の大寒の入りから二月四日の寒明けまで、耐寒鍛錬を実行することになったとある。

「大政翼賛会」では、「耐寒心身鍛錬」として、武道、体操、早朝の神社参拝を兼ねた徒歩鍛錬、通勤通学、神社御陵巡り、二キロ以上の徒歩、家庭での早起きと薄着、乾布・冷水摩擦、その場かけ足や足踏みによる鍛錬を挙げた。

「これは全国民一人残らず鍛錬をして、御奉公しようといふのですか

ら、皆さんも一しよになつてやらなくてはなりません」ともあり、「皆さん」つまり、読者である国民学校生徒も実行を迫られたということであり、第九首「寒稽古」、第二三首「薙刀」はこの方針以前にも行われていたことではあるが、耐寒心身鍛錬の一環でもあった。

第一七首は、寒中ではあっても、麦の生育に「聖戦の春」を見つけたのが、伸び行く児童であったということ。

第一八首は、在籍校と季節から、「ほの暗き灯」だけでなく寒さの中で「決意」を語り合ったということ。

第三〇首の作詠時は不明であるが、掲載からの推測では、勤労奉仕で寒中での炭の運搬にあたった児童への激励であったということか。

〈2〉

第二首は、「少年工」が、始業前、工場裏で手紙を読んでいるのを作者が見ているというもので、「戦時下」を内容とする作品としたのは、「少年工」に着目するからである。

「少年工」は、国民学校を卒業して工場に就職した少年労働者であるが、昭和十七年三月十九日に、東京の新卒学童約三万五千人の門出を祝う「産業豆戦士壮行会」が日比谷公園で挙行され、昭和十八年三月十九日にも「少年産業戦士壮行会」として、日比谷公園で開催されるところとなり、少年労働者は、「産業戦士」として位置付けられ、出征した工場労働者に代わる働き手としての役割を担うところとなっていった。

〈3、4、7、20、24、25、28、29、31〉

これら九首は、何れもが、作者の児童が詠歌の当事者となっている作品。

第三首と第三一首は、作者の兄が出征中。第三首の「君」は、大君、すなわち天皇のことであり、出征は「君のため」と教えられており、第三一首では「先陣の兄」に児童たちも担うことになった「増産」について「こまごま」と書き送ったということ。第四首の「凱旋兵士迎へ」は、戦場からの帰還兵の出迎えに雪道を行く「子ら」の一人が作者ということ。

第七首「神風の伊勢の御神」は、伊勢神宮。作者の児童が伊勢神宮に参拝して、「死して」の護国を誓ったということであるが、「少國民新聞」は、昭和十七年八月十九日（水・第一八三八号）第一面に次のような記事を掲載した。

伊勢参拝に　今年はいかれます
　　まづ帝都で学童十万人

国民学校六年生の伊勢神宮参拝旅行は、去年から、汽車が大変込むので止められてゐました。けれども今年は、鍛錬と国体の精華を身に体するため、伊勢神宮、樫原神宮、桃山御陵の参拝に限り、特に団体旅行が許されることになりました。

この記事では、「まづ帝都」の六年生が、九月一日から十月六日までの第一回、十一月一日から十二月中頃までの第二回の各期間に、二千名づつ出発するというもの。

第七首「神風の」の児童は横浜市在住であり、「伊勢参拝」が東京だけでなく実施されるようになったことから詠われたということ。

第二〇首「神棚に」、第二五首「霜の朝」は、家の中の「神棚」に、家の外の「社頭」に、出征兵の武運長久を祈願するということ。

第二〇首「欲しがりません勝つまでは」は、大政翼賛会と朝日新聞、東京日日新聞、読売新聞の三紙が、大東亜戦争開戦一周年記念に公募した「国民決意の標語」に入選した一〇作品の一つ。昭和十七年十一月二十七日に発表された。作者は国民学校五年生の女子児童ということであったが、戦後、本当の作者は父親であったことが判明した。

第二四首は、戦地に送る慰問袋に弟と作った干柿を入れて送るというもので、神社での武運長久の祈願と共に、児童の担った役割の一つ

が、慰問袋の作成。在籍校・学年・氏名は掲載されていないが、干柿を作ったのは兄弟の児童であったということ。

第二八首は、出征するのは人間だけではなく、軍馬となる馬も出征するということ。「また多数」とあることから、この地域では、これまでも数多くの馬が軍馬として出征していったということか。

第二九首では、登校する時にはなかった「入営の旗」が、下校時には「鍛冶屋」に掲げられていたというもので、作者の児童は、やがてこの出征見送りに日の丸を振る列に加わることになる。召集令状が届いた家庭では、「入営」の印として日の丸を門口に掲げた。出征の見送りと帰還の出迎えは、児童の役割でもあった。

〈5、12、21〉

これら三首は、戦果を喜ぶのが内容。何れも、詠歌時期は不明だが、掲載時から推測してみる。

第五首（一月三十一日掲載）の「新聞」は「少國民新聞」を指すと考えられることから、同新聞での見出しに「大戦果」とあるのは、掲載前の一か月では、昭和十七年十二月五日（土・第一九三〇号）第一面に「またも轟く大戦果　ルンガ沖（ガダルカナル島の北岸）夜戦水雷戦隊得意の強襲」。

第一二首（二月十一日掲載）の「陸海の戦果」が「少國民新聞」に掲載されたのは、前年（昭和十七年）十二月八日（火・第一九三二号）。「神わざ、一年間のこの戦果」の見出しで、大本営発表の陸軍と海軍の戦果が掲載されたこの日は、「一年前のハワイ真珠湾強襲」から一周年。「今日のよき日」は、十二月八日のことか。

第二一首の「戦勝」が指すものは詳らかではなく、また、詠歌時期も不明であるが、掲載時（二月二十三日）以前での「戦勝」を「少國民新聞」に探してみると、「又もあがる海の凱歌　敵の巡洋艦を轟沈」（二月六日・土、第一九八二号）、「南太平洋に新戦果加はる　二十六隻を撃沈破　去年八月七日以来の未発表の分」（二月十四日・日、第一九八九号）などが掲載されていた。

〈8、14、16〉

以上の三作品は、天皇に関するもの。

第八首「大みいつ」、第一四首「大君」は、天皇のこと。第一六首「空晴れて」は「二重橋」の向うの皇居に向かっての遥拝。

〈10、22、26〉

第一〇首「光映ゆる探照灯」は、夜間、空襲に飛来する敵機を探索している様子を作者が目にしたもの。アメリカ軍が昭和十七年四月十八日に、東京、名古屋、神戸を初空襲したことから、以後、防空態勢が強化されるところとなったということ。

第二二首「隼」は、陸軍の「一式戦闘機」の愛称。「隼」の名称は、「空の軍神」とされた「加藤隼戦闘隊長」（「少國民新聞」昭和十七年七月二十三日・木、第一八一五号）として国民に、児童に広く周知されていた。

第二六首「ソロモン島のいくさ」が何時を指すのか不明であるが、「少國民新聞」では「又も上がる海の凱歌」（昭和十八年二月六日・土、第一九八二号）の記事をソロモン諸島海域の地図ともに掲載した。作者の児童は、「空を飛ぶ飛行機みて」ソロモン島の戦闘を思い浮かべたということであるが、この記事にはソロモン諸島で「日米両国軍が、空中戦と海上戦を続けてをり」ともあり、児童がこの記事を目にしていたことが推測出来よう。

〈11、13、15〉

「日の御旗」「日章旗」「国旗」、何れも「日の丸」の旗。作者の児童の在籍校は北海道、青森県、埼玉県であるが、児童たちが見上げるのは「日の丸」。

〈19〉

「半島」は、朝鮮半島のこと。「半島の婦人」とは、朝鮮半島出身の女性のことであり、児童がそのことを知っていたということ。「半島の婦人」が直接「戦時下」ということではないが、朝鮮半島は、大東亜戦争終結まで「朝鮮同胞」（「少國民新聞」昭和十七年九月十七日・木、第一八六三号）であったことから、「戦時下」色の作品とした。

第一四半期における「短歌」の「戦時下」は、兄が出征中という、当事者であり、出征の見送りに、戦地から帰還した兵士の出迎えに、日の丸を振って整列することであった。通学路の鍛冶屋から出征があり、近所の馬も出征の準備か、蹄鉄を打つ音が夜通し聞えてくる。これらの見送りの列にも並ぶことになる。

戦勝祈願の神社参拝も、慰問袋の作成も児童の役割であった。

満洲に行った友から厳寒を聞いていたか、それに比べて内地の寒さは耐えなければならない。

飛んで行く飛行機を見上げて遠いソロモンの戦いに思いを馳せ、真珠湾攻撃から一周年の戦果発表に心を躍らせ、「大君」に米英撃滅を誓う児童がいた。

なお、第一四半期での「企画作品」は、勅題「農村新年」。一月六日・水、第一九五五号に次の四作品が掲載された。何れも、千葉県小見川校高一男子四名による作品。

・新しき年を迎へて農夫吾等鍬にしめ縄飾りて祝ふ
・あら玉の年を迎へて野良人等増産報国誓ふ神垣
・正月のやすみを子供隣組今日も縄なふ勝ちぬくために
・広いたんぼ今日は農夫の影もなく凧合戦のうなりはげしき

新年を迎える慣例的な課題設定であろうが、氏神に「増産報国」を誓い、子供隣組の正月休みは皆で縄をなうことであった。

一方、第一四半期の「短歌」は、「企画作品」の四首のほか、「投稿作品」は七三首であり、そのうち「戦時下」の内容をもつ作品が三一首あるものの、残りの四二首は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

・一粒の麦も多くと八十路越えし我が祖父けふもうまず麦踏む
（山梨県谷村第一校高一男子、一月三十一日・日、第一九七七号）
・麦畑に豆まき居れば夕焼けの空にとびゆく二羽の山ばと
（埼玉県藤沢校高一男子、二月二十八日・日、第二〇〇一号）
・寒風にうなりも高き電線の下で農夫の麦をふみをり
（東京府町田校高二男子、三月二十八日・日、第二〇二五号）

何れも作詠時期は不明だが、麦畑に纏わる作品。

「一粒の」は、孫の作者が麦踏みしている祖父を詠んだものだが、八十歳を超えた祖父とともに麦踏みをしてのことであろうが、作者の父は麦畑には居ないということか。

「寒風に」は、強風で電線がうなりを立てている中でも、農作業の手順から麦踏みをこなす農夫を見ての作品ということ。「一粒の」とともに、麦踏みの時期は霜柱の立つ寒い時期に必要な作業だ。

「麦畑に」豆をまくのは、麦の収穫の後に取り入れとなる豆で、大豆か。「夕焼けの空にとびゆく二羽の山ばと」を見送っているのは、種豆を蒔いている作者ということ。

・雪割りて蕗の芽萌ゆるこの頃は春まだ浅く野辺かすむなり
（茨城県沼前第一校六年男子、二月十三日・土、第一九八八号）
・見上ぐれば遙か向かふの枯れ山に真白き雪のかすかに見ゆる
（長野県上村校高二女子、同前）
・日だまりの南向きなる土手の上梅のつぼみもやわらきかな
（埼玉県飯能第一校高二女子、同前）

何れも二月十三日に掲載された作品で、作詠時期は不明だが、それぞれの在籍校所在地の早春が内容。

「雪割りて蕗の芽萌ゆる」では雪の中の蕗のトウに浅い春を、「見上ぐれば」では視界の先の山に消え残っている雪を見つけ、「日だまり

の」では梅の蕾をつまんでみて、その柔かいことから開花間近を思ったというもので、作者の住居で見て、触っての早春ということ。

・うす暗き灯火の下に指折りて雪の短歌に余念なきかな

（北海道松鶴校高一男子、三月三十一日・水、第二〇二七号）

・春の朝着かへんとするわがシャツに粉石鹸のかすかに匂ふ

（岩手県飯岡第一校高一男子、同前）

この二つも作詠時期は不明だが、三月三十一日に掲載され、北海道では「雪の短歌」に指を折り、岩手県での朝の着替えは「春」だった。在籍校による季節の中で児童が生活していることから生まれた作品ということである。

以上、昭和十八年第一四半期の投稿作品「短歌」を検討してきた。企画作品の四作品を併せて、掲載された七七首のうち三三首が戦時下色を内容とするものであり、掲載率からは約四二・九％であった。

直前期の十七年第四四半期に掲載された「短歌」は二八首で、この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、一八首であり、掲載作品に占める掲載率は約六四・三％であったから、掲載率からは、戦時下色の作品は低下したことになるが、掲載数では増加しており、児童が置かれた戦時下はいよいよ色濃くなってきたことの現われといえる。

三　昭和十八年第二四半期の「短歌」

第二四半期（四月～六月）に掲載された「投稿作品」は一二三首。この内、「戦時下」の内容をもつ作品は、次の七〇首であり、掲載率は約五六・九％。

また、第二四半期での「企画作品」の掲載は三作品。このうち「戦時下」の内容をもつ作品は一作品。

従って、第二四半期に掲載された一二六作品の内「戦時下」の内容をもつ作品は七一作品であり、掲載率は約五六・三％となる。

以下、「投稿作品」における「戦時下」の内容をもつ作品七〇首を検討するが、第一四半期を引き継いで整理番号を付す。

32　寒空に銀翼編隊きらきら（ママ）と我が家の真上過ぎ行く

（群馬県中野校高二女子、四月二日・金、第二〇二九号）

33　青き麦踏むこの足は大君に召されし兵の家護るなり

（群馬県中野校高二女子、同前）

34　くんれん（ママ）に母はぼうしをかぶりゐぬ母とわからず通りすぎけり

（茨城県県磐原校三年男子、四月九日・金、第二〇三五号）

35　勇ましく天かけり行く飛行機は藁火の煙に見えかくれ行く

（神奈川県横浜市神橋校五年女子、四月十四日・水、第二〇三九号）

36　朝礼の日の丸仰ぐ我等今強く伸び行く明るさを感ず

（神奈川県横浜市神橋校五年女子、同前）

37　空軍のとどろく戦果数知れずわがあこがれの日毎に強まる

（岩手県遠野校五年男子、同前）

38　天皇のみたてとなりて死ぬる日はいつかと思ふわが心かな

（東京市小石川区柳町校五年男子、四月十六日・金、第二〇四一号）

39　張りかえし白き障子の清らかさ静かなる夜も国は戦ふ

（岩手県飯岡校高一男子、同前）

40　大空を今かけり行く銀翼機兄のつくりしものもまじるか

（群馬県中野校高二女子、同前）

41　アリューシャンに冬を送りし兵隊を思ひつわれは冷水摩擦す

（東京府武蔵野第三校六年男子、同前）

42　戦地より届きし兄の便りよみうららかな春知らせやりたし

（北海道松鶴校高一男子、同前）

43　春嬉し一歩一歩に増産の心をこめて麦をふみゆく

（福島県伏黒校六年男子、同前）

44　一日の勤めを終へて夕食の箸とる時の心たのしき

（岩手県飯岡第一校高一男子、同前）

45　お父さん御覧下さい此の意気を寒さねむさもみな蹴散らして

（神奈川県横浜市神橋校五年男子、四月二十三日・金、第二〇四七号）

46 戦ひて勝たざることのなき国に生まれし幸よ青麦を踏む
（群馬県中野校高二女子、四月二十九日・木、第二〇五二号）

47 忠霊の眠り給へるこのお宮の石段清む春の一日
（新潟県岩室西校六年男子、同前）

48 旗立てて送られ行きしわが兄の武運を祈る大神の前
（長野県永明校高一男子、同前）

49 有難しとおし頂きて老いし父封ひらくなり軍事郵便
（山形県上ノ山校高一男子、同前）

50 一億の血潮みなぎり英米にとどめさすまで撃ちてし止まむ
（山梨県大藤校六年男子、四月三十日・金、第二〇五三号）

51 野もさけむ山も動かむ火のつつの音もとどろに撃ちてし止まむ
（同前）

52 今日も又我等が務にいそしみて東亜の敵を撃ちてし止まん
（山梨県大藤校六年男子、同前）

53 少国民銃後の務がつしりと撃ちてし止まむ敵米英を
（山梨県大藤校六年女子、同前）

54 産業の人手不足にをみならもハンマー打ち振る姿雄々しき
（神奈川県藤沢市藤高校高一男子、同前）

55 真珠湾玉とくだけし九つのみたまよ護れ南方の海
（岩手県盛岡市盛岡校高一男子、同前）

56 兵隊さんに慰問袋を送る日のわが家のなかは声にぎやかなり
（秋田県七日市校五年女子、五月二日・日、第二〇五五号）

57 雨の朝風の夜にも南方に働く父の姿しのばる
（埼玉県川越第二校五年男子、同前）

58 ほがらかに縄なひしつつ歌うたふ召さるる兄はあと幾日か
（北海道松鶴校高一男子、同前）

59 家の馬ひひんとないてはみを食ふ軍馬になれぬなさけない馬
（秋田県草木校五年女子、五月五日・水、第二〇五七号）

60 銀翼の光輝く飛行機が五台並んで通りすぎたり
（北海道函館市鍛神校五年男子、五月九日・日、第二〇六一号）

61 時計うつ六時の音に起き出でて若葉のにほふ宮掃除かな
（神奈川県川崎市高津校高二男子、同前）

62 クレヨンを持てばすぐさま日の丸をかく子たのもし国戦へり
（青森県野辺地校高二男子、五月十二日・水、第二〇六三号）

63 応召の旗ひらめかし供出の米は行くなり都市へ工場へ
（新潟県岩宮西校六年男子、同前）

64 松ごしに時々見える練習機春の日ざしをまぶしくかくせり
（埼玉県飯能第一校高二女子、五月十九日・水、第二〇六九号）

65 前線の便りせうえんのにほひすと老いたる祖母はいくたびか読む
（東京府武蔵野第三校四年男子、同前）

66 夜行軍月夜となりて青麦の穂並のゆれて美しく見ゆ
（山梨県菅原校高一男子、五月二十一日・金、第二〇七一号）

67 この花のほかに花なし桜花散りにし父に手折り捧げむ
（新潟県新発田校高二女子、同前）

68 提督の最後と題す放送に感激深し一億の民
（千葉県千葉市登戸校五年男子、同前）

69 米英を撃ちてし止まむ意気にもえわれは励まむその日その日を
（東京市日本橋区箱崎校六年男子、五月二十三日・日、第二〇七三号）

70 ありし日の山本元帥の写真をばあかず眺めぬ口惜し涙で
（埼玉県妻沼校高二男子、五月二十七日・木、第二〇七六号）

71 司令長官の空の戦死をとむらふが如くに散り来るわが家の桜
（岩手県盛岡市盛岡校高一男子、同前）

72 えいえいと武運の声のたのもしさ明日の日本を背負ふ僕達
（東京市荒川区第二峡田校六年男子、同前）

73 ゆたかなる春をむかへし喜びに遠い戦地のつわものを思ふ
（岩手県盛岡市桜城校五年女子、同前）

74 靖国の神に誓ひて国のためいよいよ励まむ幼けれども

（山梨県大藤校高一女子、同前）

75 グライダー青空高く飛立ちて希望にもゆる桜咲く頃
（青森県青森師範附属校高一男子、五月三十日・日、第二〇七九号）

76 大君に弓ひく国をほろぼして早くきづかむ大東亜
（岩手県盛岡市盛岡校高一男子、同前）

77 共栄圏の友に見せばや日の本の桜花咲くうるはしの春を
（岩手県盛岡市桜城校六年女子、六月四日・金、第二〇八三号）

78 皇国の花と散られし元帥の決意身にしむ男の子ぞ我は
（東京府成蹊初校四年男子、六月六日・日、第二〇八五号）

79 靖国の神となられし元帥のみたま安かれ我等続かん
（東京府武蔵野第二校四年男子、同前）

80 わが県の生みし偉大の提督が散りにし空にわれら続かん
（新潟県岩室西校高一男子、同前）

81 御いくさの最前線に立ち給ふわが提督の姿たふとし
（群馬県館林南校六年男子、同前）

82 提督は神去りませど敷島の大和心はふるひ立ちたり
（群馬県館林南校六年男子、同前）

83 出征の勇士を送りわれらみなあと続かんと誓ひけるかな
（群馬県川田校五年男子、同前）

84 いさをしに弔旗もふるふ五月風青葉の下にもくたうをする
（岩手県盛岡市盛岡校高一男子、六月九日・水、第二〇八七号）

85 大空に華と散りにし提督の御霊送る日わが胸いたむ
（岩手県盛岡市盛岡校高一男子、同前）

86 国葬の有様伝へる放送にいつしか眼に涙たまりぬ
（神奈川県横浜市第三中学一年男子、同前）

87 奉戴日掲揚塔の日の丸をぐつとにらんでしばし立ちたり
（東京市荒川区第二峡田校六年男子、同前）

88 供出米運ぶリヤカー続き行く昨日も今日も天気のよい日
（岩手県小山校高二男子、同前）

89 アッツ島死守せる勇士ことごとく玉と散りしとききし口惜しさ
（80と同じ新潟県岩室西校氏名だが、80では高一、ここでは高二・男子、同前）

90 アッツ島の玉と砕けし英霊に我は続かんただ一筋に
（東京府武蔵野第三校六年男子、同前）

91 窓をうつけふの嵐のはげしさに戦の庭の父上を思ふ
（秋田県船越校六年男子、同前）

92 今年から指折りかぞへていく年ぞ君の御たてといで立つ時は
（北海道金原校高一男子、同前）

93 山登りばく音高き飛行機の雄姿を見れば心勇みぬ
（山形県平野校五年女子、同前）

94 わが母は戦地の兄の夢を見て嬉しかりしと朝早く語る
（長野県日野校六年女子、同前）

95 また明日もやつてくれよと鼻づらをなでる勇士に馬のいななき
（東京市世田谷区守山校六年男子、六月十一日・金、第二〇八九号）

96 武道会撃ちてし止まむの意気にもえわれは相手をぢつと見つめる
（東京市日本橋区箱崎校六年男子、同前）

97 暖く静かに晴れた日曜日増産めざし麦の土入れ
（長野県日野校六年女子、六月二十三日・水、第二〇九九号）

98 アッツ桜わがつはものが血にそめしそのいさをしを世々語るらん
（北海道温根湯校六年女子、同前）

99 増産の麦刈り終へてにこにこと肩を組みつつかへる友どち
（静岡県地名校六年男子、六月二十五日・金、第二一〇一号）

100 元帥の幼き時のことどもを紙上でよみて恥じらふ我は
（東京市日本橋区千代田校六年男子、六月三十日・水、第二一〇五号）

101 戦地より来べき便りを父母は日毎に待てど口にいださず
（埼玉県藤沢校高一男子、同前）

以下、内容的に類似する作品ごとに検討する。

〈32、35、37、40、60、64、93〉

以上の七作品は、「戦闘機」が戦時下。六作品が空を飛んで行く「戦闘機」を見上げる児童の作詠であり、第三七首は「少國民新聞」に掲載された戦果を見ての作詠ということか。紙面には、随時、「戦果」が掲載されており、第三七首の作詠及び投稿時期は不明であるが、三月九日（火・第二〇〇八号）第一面には「百二十四機撃墜破　南方に揚る戦果」を掲載していた。

第四十首の「銀翼機兄のつくりしものもまじるか」からは、兄が飛行機の軍需工場の工員であるのか不明であるが、兄から「銀翼機」の製造に関わっていることを聞いていたということ。

〈33、43、46、66、97、99〉

以上の六作品は、第一四半期の麦踏みの作品同様、秋に種をまき初夏に収穫を迎える冬小麦に関わる作品。第六六首「夜行軍」の他は、何れも麦の栽培に作者の児童自身が関わるもの。児童の農作業は、成人が軍隊に出征した農村においては立派な労働力であり、働き手が入営した農家への援農は児童に課せられた銃後奉公の一つ。第三三首「青き」麦踏みから、第九九首「麦刈り」まで、児童は、自宅での農作業の他、出征兵士宅での農作業の担い手であった。

第六六首「夜行軍」は、心身鍛錬のための夜間の行動訓練。月夜に見える麦は「青麦」で、実が熟す時期ではない頃の夜の行軍訓練ということ。

第九九首「増産の」は、麦刈りを「友どち」と済ませた充実感が詠まれたものであろうが、自宅の麦刈りではなく、援農でのことか。昭和十八年六月十日の「少國民新聞」（木・第二〇八八号）は第一面に「日比谷公園で麦刈り」の記事を麦刈りをしている児童の写真を添えて掲載した。「日比谷校五年のお友達三十七人が、南校長先生の号令に従つて」手際よく刈り取っていくというもので、通りかかった「東京第一陸軍病院の白衣勇士」が児童たちに刈り方を教えてくれた麦は「お馬の大好物の大麦なので、乾かした後、陸軍糧秣廠へ献納」されるという。

食糧増産に一坪の土地も遊ばせてはおけないと、各大臣官邸の空地にも、野菜畑を作らうと、みんな頑張つてゐる時、帝都の少国民が日比谷公園の麦刈りとは、何と意義深いことではありませんか。

記事の結びであるが、日比谷校での麦刈りは「食糧増産」への、一種のキャンペーンであるが、第九九首の「増産の」は、児童が「食糧増産」の担い手であるということ。

〈34、45、56、57、58、91、94〉

以上の七作品は、作者の家族の「戦時下」が歌い込まれている。

第三四首「くんれんに」と第九四首「わが母は」は、母親の「戦時下」。

「くんれんに」では、何らかの訓練に参加中の母が帰宅後、訓練の横を過ぎゆく作者を見かけたことを話したということか。どのような訓練であるか不明であるが、被っていた「ぼうし」は防空頭巾でもあったか。

第九四首「わが母は」では、作者の兄は出征中。「戦地の兄」であるから、母はその安否に気が気ではない。そんな心配ゆえ、無事で元気な兄の夢を見たことがうれしく、早速、作者に話して聞かせたということ。喜んでいる母を見て、作者もうれしいということ。

第四五首「お父さん」、第五七首「雨の朝」、第九一首「窓をうつ」は、家族とともに居ない父親の「戦時下」。

「お父さん」では、「寒さねむさもみな蹴散らして」飛び起きた「意気」を父親に見てほしいと願うもので、父親は不在ということ。不在の理由は不明であるが、父親は出征中か、或いは戦死しているか、と

推測した。

「雨の朝」では、「南方に働く」父親に思いをはせるが、父親は「南方」で働く軍属ということであろか。

「窓をうつ」では、父親は「戦の庭」、すなわち戦場にいるということであろう。

第五六首「兵隊さんに」では、にぎやかに慰問袋を作る家族がおり、第五八首「ほがらかに」では、近日中の入営を控えた兄の歌に聞き入る作者がいるということ。兄の「戦時下」は入営であり、作者の「戦時下」はそんな兄の心境に思いをはせること。

〈36、62、87〉

以上の三作品は、「日の丸」。第三六首「朝礼の」と第八七首「奉戴日」は、校庭に整列して掲揚台にはためく「日の丸」を仰ぎ見るものだが、後者「奉戴日」のは「大詔奉戴日」であるために児童には緊張と決意が求められ「ぐつとにらんで」の遥拝となるということ。

第六二首「クレヨンを」の作者は高等科二年生で、クレヨンで日の丸を描いているのは幼少の弟か知り合いの幼児であろうが、平時では幼少者のほほえましい光景でも、戦時下にあっては、やがては国のために戦場で戦う末頼もしい子供ということになる。

〈38、76、92〉

以上の三作品は、忠君愛国。

第三八首「天皇のみたて」、第九二首「君の御たて」は、醜の御楯のこと。天皇を外敵から守るため死んでもかまわない、楯となって死ぬことが本望との教育。

第九二首の「大君」は天皇のことであり、「大東亜」は大東亜共栄圏。大東亜共栄圏の達成は「大君」の意図するものであり、それを阻むものは「大君に弓ひく」もので、滅ぼしてしまう必要があるということ。

〈39、55、72、73、74、83〉

以上の六作品は、銃後にいる児童の意識。

第三九首「張りかえし」は、張り替えた障子の明るく清らかな夜の部屋に居る自分、それに対して戦っている軍隊があるという意識。

第五五首「真珠湾」の「九つのみたま」は、昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃に特殊潜航艇で参加し戦死した九人のこと。九人は、翌十七年三月六日に大本営から氏名を発表され、新聞は「九軍神」と神格化し、以後、「九軍神」は国民の戦意高揚を担うところとなった。

第七二首「えいえいと」は、集団で実施された心身鍛錬の場での掛け声か。作者もその一員として集団の中におり、「明日の日本」つまり「明日の戦争」を担うものであることを意識しているということ。

第七三首「ゆたかなる」は、春を迎えられたのは「遠い戦地のつわもの」のお陰と意識しているということ。

第七四首「靖国の」は、靖國神社の神、すなわち戦死した兵士に誓うということ。作詠時期は不明であるが、第五回の遺児が靖國神社に参拝する「社頭対面」は三月二十七日から三日間実施され、「遺児四千八百五十九名」（「少國民新聞」昭和十八年三月十三日・土、第二〇一二号）が参加予定であり、作者もその一人であったということか。

第八三首「出征の」は、出征兵士の見送りをした「われらみな」が、後に続いて兵士となることを誓ったというもの。「あと続かん」との決意が意識されているということ。

〈41、89、90、98〉

以上の四作品は、日本軍が占領していたアリューシャン列島アッツ島のこと。

第四一首は、作詠時期は不明であるが、「アリューシャンに」は、厳寒の地に守備している兵隊さんのことを思えば、「冷水摩擦」もなんのその、寒さに耐えて鍛錬しているということ。

第八九首、九〇首、九八首は、五月三十日十七時に大本営から発表

されたアッツ島守備隊の玉砕のこと。「少國民新聞」は、昭和十八年六月一日第一面全紙（火・第二〇八〇号）に、「壮烈、アッツ島守備隊　大敵に最後の突撃　玉と砕けた二千の英魂」の見出しで玉砕の発表を掲載した。大本営の発表は日曜日の夕方であり、「少國民新聞」は月曜日が休刊のため、六月一日の紙面で、三十日夜に放送された谷萩陸軍報道部長の玉砕に至る経緯が掲載された。また、同紙面では、「山崎部隊全将兵のお話を、ラジオや新聞で知つた全国の少国民は三十一日の月曜日、重なる恨みをどうしてはらさうかと、歯ぎしりをかみました。」との記事を「この仇、きつと討つ　少国民の目に悲憤の涙」の見出しを付けて掲載した。

第九八首の「アッツ桜」は、アリューシャン列島アッツ島とは所縁のない南アフリカのナタール地方原産の球根植物の和名で、日本には大正末頃に渡来し栽培が始まったとのこと。

なお、和名「アッツ桜」の由来の一つには、アッツ島玉砕を悼んでつけられたとの説もあるようだが、国民がアッツ島玉砕を知らされたのが五月三十日の夕刻であり、第九八首の掲載が六月二十三日であった。詠歌時期は不明であるが、第八九、九〇首の掲載が六月九日であり、ラジオ放送から十日目であったから、これを援用すると、「アッツ桜」の作品は、六月十三日には投稿されていたと考えることができよう。ということであれば、和名の由来の一つであるアッツ島玉砕を悼んで命名されたとの説は二週間程度で児童の歌語となったということになる。「アッツ桜」の由来が知りたいところである。

〈42、49、65、101〉

以上の四作品は、軍事便。父母も祖母も、作者の児童も、皆、戦地からの便りで出征した肉親と繋がっている。唯一の繋がりが軍事便ということである。

第一〇一首「戦地より」。軍事便が届けば安心し、間があくと安否が気がかりになる。心中では不安になりながらも、口に出すことはない。不安を口にすれば、悪いことが現実になりそうだからだ。作者の児童には、兄からの便りを不安と期待で待っている両親の心中が見えているということ。

〈44、54〉

以上の二作品は、勤労にまつわるもの。

第四四首「一日の」の勤めを終えたのは高等科一年生の作者。勤めの内容は不明だが、一日を学校ではなく「勤め」で過ごしたということ。

第五四首「産業の」は、高等科一年生の作者が、産業の人手不足から「をみな」、すなわち女性がハンマーを打ち振り働く姿を見て「雄々しき」と感動したということ。作者にとって、女性がハンマーを振るう働き姿は見慣れなかったということ。男手の不足が女性を重労働に駆り立てていく社会状況が児童の目に「雄々しき」と映ったということ。

〈47、48、61〉

以上の三作品は、神社と児童の役割。

第四七首と第六一首は、神社の清掃をする児童。第四八首は、出征した兄の武運長久を神に祈る児童のこと。神社の清掃奉仕と出征兵士の武運長久を祈ることは児童の役割。

〈50、51、52、53、69、96〉

以上の六作品は、「撃ちてし止まむ」。これは、三月十日の第三十八回陸軍記念日の標語。「少國民新聞」は、昭和十八年二月二十四日第一面（水・第一九九七号）で、この標語が添えられた陸軍記念日のポスターが出来上がったことを報じた。

この標語は神武天皇御東征の御製に拝するもので、来年の陸軍記

念日まで一年間、全国民が唱へ続けて、敵をうち倒す決意を固めるのです。

「撃ちてし止まむ」は、陸軍記念日の標語であったものが、全国民の決意とされたというもの。「敵を討ち果たさずにはおかない」という決意は、児童にも刷り込まれるところとなった。

「少國民新聞」は、昭和十八年三月十三日第一面（土・第二〇一二号）に、「写真は撃滅精神を習字にあらはす町田校生」の写真を添えて、次の記事を掲載した。

「撃ちてし止まむ」精神
各科の授業に織込む町田校

東京府下町田校では、憎んでもあきたらぬ米英に、肉弾となつて突撃する「撃ちてし止まむ」の魂を、あらゆる学科に織込んでゐます。みんなは書方の時間に、古新聞の草紙に、「米英撃滅」「撃ちてし止まむ」と太い筆を揮つて、必勝の一点へ総進軍してゐます。

第五〇、五一、五二、五三首は、何れも山梨県大藤校六年生の作品であり、大藤校での取り組みであったということ。

第九六首の「撃ちてし止まむ」は、派生的な使用例であろうが、児童の生活環境にまで浸透していたということ。

〈59、95〉

この二作品は、軍馬。第五九首は、軍馬になれない「家の馬」を情けないと嘆くもの。作者の知る馬が軍馬になっているのに、どうして家の馬がなれないのか、その当事者の馬は呑気に「はみ」を食んでいる、ということか。

第九五首は、「勇士」を兵士と考え、馬を軍馬と考えた。作品は、軍馬の「鼻づらをなでる勇士」を見ての作詠であろうが、作者の児童が見た状況はどのようなことであったのか。

〈63、88〉

この二作品は、前者が新潟県、後者が岩手県の児童によるもの。「供出米」が運ばれていくことは戦時下でなくても行われることであるが、「応召の旗ひらめかし」とあることが「戦時下」。第八八首も応召米と考えられ、米の生産地からの供出は、作者の児童が生育や収穫に関わっていたとも考えられよう。

〈67、75、77〉

以上の三作品は、戦時下の桜花。第六七首「この花の」は、戦死した父に桜花を供え、供養するというもの。

第七五首の「希望にもゆる桜咲く頃」の一節は、新入生、新学期と所縁を持つ一般的な表現であるが、グライダーとの取り合わせが「戦時下」での桜花となる。青空高く飛び立ったグライダーは、児童を大空へ、すなわち「飛行機乗り」へと誘い、航空兵への憧れを醸成する「航空錬成一日入隊部隊」（「少國民新聞」昭和十八年二月十三日・土、第一九八八号。「少国民入営部隊の一日」）でのグライダー訓練へと連絡する。

第七七首は、「共栄圏」すなわち、「大東亜共栄圏」の創生が「戦時下」であったからである。

〈68、70、71、78、79、80、81、82、84、85、86、100〉

以上の一二作品は、昭和十八年五月二十一日十五時に大本営から発表された山本五十六連合艦隊司令長官の戦死にまつわるもの。

第六八首「提督の最後」は、四月十八日ブーゲンビル島上空で、搭乗していた一式陸攻機がアメリカ軍の襲撃を受け被弾墜落、戦死したこと。国民への発表は五月二十一日まで伏せられた。

第七〇首「ありし日の山本元帥の写真」は、「少國民新聞」昭和十八年五月二十二日第一面（土・第二〇七二号）に、「山本連合艦隊司令長官戦死」の記事とともに掲載された。

第八〇首「わが県の生みし」の出身は、新潟県長岡市。

第八六首「国葬の有様伝へる放送」は、六月五日、日比谷公園葬場での国葬の様子がラジオによって日本全国と大東亜各地に流された。

第一〇〇首の「紙上」は、第七〇首と同じ紙面。

第二四半期における「戦時下」は、七首が戦闘機を見ての作品。飛び行く戦闘機は勇ましく、児童の憧れは日毎に増した。

第一四半期の三月十日の第三十八回陸軍記念日ポスターに添えられた標語「撃ちてし止まむ」に反応して投稿された作品が第二四半期に六作品掲載され、作者の児童も敵を討ち果たさずにはおかないという決意を詠み込んだ。

出征している兄へ故郷の春を知らせてやりたいと詠った弟、近々入営する兄の鼻歌を聞く弟、戦地の兄の夢を見て喜ぶ母を詠んだ妹。家族が出征中なのはこの第二四半期にも見られた「戦時下」であった。

この第二四半期での兄の武運長久を祈る神社参拝と忠霊の眠る神社清掃も第一四半期同様、児童の役割であった。

第一四半期に見られた「戦時下」は、この第二四半期においても作品に詠い込まれていたが、第二四半期での特記する内容の作品は、五月二十一日に知るところとなった、山本五十六連合艦隊司令長官の戦死と同三十日に発表されたアッツ島守備隊の玉砕にまつわる作品であった。前者は一二首が掲載され、そのことからもその衝撃の深さを測ることができよう。

第二四半期での「企画作品」は、六月十八日（金、第二〇九五号）の「作品の学校特集　東京市赤坂区氷川校」に「綴方」「詩」「書方」「図画」とともに掲載された「短歌」三作品。

「作品の学校特集」を、時々のせることを、前にお約束いたしました。その後、はうぼうの学校から、日頃の勉強の結果をまとめて、作品を送つて下さいました。そこでけふは、その第一回として東京の氷川校をのせます。

「作品の学校特集」に掲載された作品は、「はうぼうの学校」が送ってきた作品を学校単位で掲載したものであり、各学校が選んで送ってきた作品ということであった。

掲載は、三作品全てが四年女子の作詠。

・クローバーのいつぱい咲いた土手の上風そよそよと花をうごかす
・かくれんぼ「いい」といはれて目をあけば人かげもない山王の森
・このグリコ鉄ぱう玉になるならばたべずにみんな兵隊さんへ

「戦時下」の内容は、「このグリコ」の作品。「グリコ」は、当時の江崎グリコ株式会社から発売されていたキャラメル。折角手に入った「グリコ」を、自分で食べずに慰問袋にいれて兵隊さんに届けたいとの歌意である。

なお、この企画欄に掲載された「綴方」の「僕等の登校訓練」、「詩」の「のりまき」、「図画」の絵柄にも「戦時下」の内容が見て取れる。

一方、第二四半期の「短歌」は、「企画作品」の三首のほか、「投稿作品」は一二三首であり、そのうち「戦時下」の内容をもつ作品が七〇首あるものの、残りの五三首は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

・麦畑を耕しをれば夕焼けの空にむかひて烏飛び行く
（群馬県中野校高二女子、四月二十三日・金、第二〇四七号）
・春陽をあびてすくすく育ち行く麦畠みればわが心伸ぶ
（群馬県川田校五年男子、五月二十三日・日、第二〇七三号）
・麦は伸び苗代青むわが里に今日も来にけり遠足の子等
（新潟県岩室西校高一男子、六月十三日・日、第二〇九一号）

麦畑に纏わる作品は、「食糧増産」を視点とした作品を「戦時下」

として検討したが、それ以外の麦畑に関する作品も掲載されていた。

「麦畑を」耕しているのは高等科二年の女子であり、年齢からの農作業は「戦時下」ゆえとも考えられるが、自家の畑作業は「戦時下」にかぎらない。夕焼け空を飛んで行く烏を見送っての作品だが、作者はどのような心境であったのだろか。

「春陽を」は、伸び行く麦と「わが心」とが伸び盛りだとするものだが、作者は五年生であり、作者の伸び伸びとした心持ちが伝わってくる。

「麦は伸び」は、高等科一年生が、麦が伸び、稲苗が育っていくように「遠足の子等」の成長を願っているという作品。

・南天の葉につむ雪の重なりて実の赤々と窓にもたれつ
（山梨県葛野校高二女子、四月十六日・金、第二〇四一号）

・かすみ立つ春の山辺は遠けれど吹き来る風は若葉の香す
（茨城県櫓校五年男子、五月二十一日・金、第二〇七一号）

・青々と茂れる草のなかゆけば鮮やか一つ赤いちごかな
（静岡県地名校六年男子、六月十三日・日、第二〇九一号）

「南天の」の作詠時期は不明だが、春の雪か。赤々とした南天の実に降り積もった白い雪、雪の重みで撓んだ南天の枝。春の雪の重さが南天の実を撓わませ、作者の部屋の窓にもたれてきた。春が近いと作者は感じたということか。

「かすみ立つ」は、見渡せる山々霞の中で若葉を見ることは出来ないものの、肌に吹き来る風は若葉の香りを運んでくるというもの。五年生の作者は、視覚で、嗅覚で、触覚で季節を受け止めて見せたというもの。

「青々と」は、初夏の草原に赤い野イチゴを一つ見つけた嬉しさだ。

これら三作品は、季節ごとの内容を詠いこんで、四季の中で育まれている児童がいたということ。

以上、昭和十八年第二四半期の「短歌」を検討してきた。第二四半期は、投稿作品一二三作品と企画作品の三作品を併せて、掲載された一二六作品のうち、企画作品の一作品と投稿作品の七〇作品、合計で七一作品が「戦時下」色を内容とするものであり、掲載率は約五六・三％であった。

直前期の十八年第一四半期に掲載された「短歌」は、投稿作品七三作品と企画作品の四作品を併せて、掲載された七七作品のうち、企画作品の二作品と投稿作品の三一作品の、合計で三三作品が「戦時下」色を内容とするものであり、掲載率は約四二・九％であったから、「戦時下」色の作品は掲載数・掲載率、ともに大幅な増加となっており、児童が置かれた「戦時下」はいよいよ色濃くなってきたことの現われといえる。

四　昭和十八年第三四半期の「短歌」

第三四半期（七月～九月）に掲載された「短歌」の「投稿作品」は七九作品。

この内、「戦時下」の内容をもつ作品は、次の二九作品であり、掲載作品に占める掲載率は約三六・七％となる。

また、第三四半期には、「企画作品」の掲載はなかった。

以下、「投稿作品」における「戦時下」の内容をもつ作品二九作品を検討するが、便宜上、第二四半期を引き継いで整理番号を付す。

102　日々むかふ机をいくさのにはとして君への誠われは果さん
（山形県余目校六年男子、七月九日・金、第二一一三号）

103　勇ましき軍艦マーチ鳴りし後告げる戦果に血潮はたぎる
（新潟県岩室西校高一男子、七月十四日・水、第二一一七号）

104　あかつきの空をとびゆく哨戒機あふげど見えず音のみ残りて
（静岡県菅山校六年男子、七月十六日・金、第二一一九号）

105　打ちふるふ鍬の音高しけふもまた力みなぎる米英必滅
（北海道政和校高一男子、同前）

106 打ちふるふ鍬に力のこもるのも敵撃滅の意気に燃ゆれば
（秋田県本荘校高一女子、七月二十一日・水、第二一二三号）

107 大休止ぬぎし帽子の乾きつつ汗の塩気の白くあらはる
（岩手県盛岡市盛岡校高一男子、七月二十三日・金、第二一二五号）

108 南さし遠く出でゆく軍艦の姿勇ましわが胸おどる
（神奈川県横浜市横浜第三中一男子、同前）

109 大君の御楯となりて征く父の晴れの軍服かくれ着てみる
（秋田県矢立校高二男子、七月二十八日・水、第二一二九号）

110 日本に生まれしことの嬉しさをつくづく思ふ国史の時間
（東京都箱崎校六年男子、八月四日・水、第二一三五号）

111 赤だすき送られて行く出征の勇士雄々しく挙手の敬礼
（東京都城東校六年女子、八月六日・金、第二一三七号）

112 一億は命のかぎりとちかひたり元帥の仇討たでおくべき
（茨城県太田校六年男子、八月八日・日、第二一三九号）

113 麦畑の手入れもをへて雨降る日小さき家に常会をする
（北海道岩部校高一男子、八月十一日・水、第二一四一号）

114 うちそろふ足なみ強く響かせつ向かふ畠に青し野菜は
（岩手県盛岡市盛岡校高一男子、八月十三日・金、第二一四三号）

115 農繁休終へし校舎の窓間より田圃はみな青々と見ゆ
（岩手県中内校高二男子、同前）

116 戦死した兄さんの顔思ふたび弟と仲よくしようと思ふ
（北海道相内校五年女子、八月十八日・水、第二一四七号）

117 遠く見る向かふの山の墓の松勇士の誉たたへる如し
（岩手県大野校五年男子、八月二十五日・水、第二一五三号）

118 万歳の声に送られて征く人の引きしまりたる顔の尊さ
（山形県余目校六年男子、八月二十七日・金、第二一五五号）

119 朝まだき鎮守の森にわが兄の武運を祈る老母の姿よ
（秋田県横堀校五年男子、八月二十九日・日、第二一五七号）

120 草刈りの人手不足に子供等もまじつて働く日曜の午後
（秋田県秋田市土崎第一校高一男子、同前）

121 ほしき物目にとまりたれどアッツ島の勇士偲びて家に急ぎぬ
（偲びは仮名。東京都武蔵野第三校四年男子、九月一日・水、第二一五九号）

122 庭先の空地を利用ひままいてわづかなれども国につくさん
（長野県日野校六年女子、同前）

123 南海に輸送の任をつくしつつ散りにし君に我はつづかん
（「木村船長自決の報をよみて」。東京都小池校六年男子、同前）

124 炎天のやけたる庭におり立ちて汗にまみれて体操をする
（埼玉県旭校高一男子、九月八日・水、第二一六五号）

125 桑の皮二十五貫のわりあてをやりとげようと夜もむきたり
（長野県日野校六年女子、九月十日・金、第二一六七号）

126 前線の勇士の苦労しのびつつあかず眺むる写真展かな
（埼玉県越生校高二男子、九月十二日・日、第二一六九号）

127 南海のガダルカナルに散華した勇士の仇うたでおくべき
（福島県好間第一校高二男子、同前）

128 組合に山とつまれし桑の皮われらが村の銃後のかたき
（長野県日野校六年女子、九月十九日・日、第二一七五号）

129 南海の空にはてにしますらをに戦ひつがん大君のため
（東京都小池校六年男子、九月二十二日・水、第二一七七号）

130 前線の兵隊さんに色も香も送らまほしき白百合の花
（東京都武蔵野第三校四年男子、九月二十四日・金、第二一七九号）

以下、内容的に類似する作品ごとに検討する。

〈102、107、110、113、115、124〉

以上の六作品は、学校に纏わる作品。

第一〇二首「ひびむかふ」は、兵隊さんは戦場が、私たちの戦場は学校でしっかり学ぶことで、それが天皇へ誠を尽くすことになるとい

うこと。

第一〇七首「大休止」は、学校での行軍で、「大休止」、すなわち長めの休憩となって脱いだ帽子には汗が乾いて塩気が白く吹いていたというもの。「大休止」までしっかりと行軍させられた証。

第一一〇首「日本に」は、「国史の時間」に、日本は開闢いらい外国からの侵略を受けたことがないと教えられ、そのことが誇らしいと教えられる。

第一一三首「常会」は「子供常会」のこと。「常会」は、情報局編集「週報」第二五一号（昭和十六年七月三十日号）で、「常会の頁」が新設され、「隣組常会は毎月一回は必ず開きませう」と、その手引きが掲載された。国策遂行にあたって、その意図が隅々まで行き渡るための仕組みが「常会」であり、その子供版が「子供常会」。学校の通学区を単位とする児童組織で、児童による墓地の清掃・参拝や勤労奉仕などが確認された。

第一一五首「農繁休」は、農村地域において、春の田植え、秋の稲刈り時期に、学校が休業となったこと。農家の児童は家の作業に駆り出され、農家でない家の児童は学校の軽作業や農家の手伝いをした。この作品の詠歌時期は不明だが、「田圃はみな青々と見ゆ」とあることから、終えた農繁休は田植え時期か。

第一二四首「炎天の」は、「やけたる庭」が家庭か校庭かが不明だが、掲載が九月八日ということから、学校での暑中鍛錬の体操と考えた。

〈103、104、108〉

以上の三作品は、児童が耳にし、目にした「戦時下」。

第一〇三首「軍艦マーチ」は、ラジオから聞こえてきた。大本営発表で海軍の戦果を伝えるときに使われていた。

第一〇四首で「哨戒機」と判断したのは、「音のみ残りて」機影がみえないからか。「あかつきの空をとびゆく」機影を探す作者も「あかつき」には起きて空を仰ぎ、爆音を聞いて機種を区別できたということ。

第一〇八首では、横浜在住の作者が出港していく軍艦を見送っているということ。勇ましい姿の軍艦は必ず戦果をあげると胸がおどった。

〈105、106、114、120、122、125、128〉

以上の七作品は、児童の勤労が「戦時下」。

第一〇五首と第一〇六首は、前者が北海道の高等科一年男子、後者が秋田県の高等科一年女子の作品。地域、性別を問わずの勤労作業であり、その心意気も「米英必滅」であり「敵撃滅」であった。

第一一四首「うちそろふ足なみ」なので、クラス或いは学年での畑作業に足並みをそろえての行進で向かうところ。

第一二〇首「草刈りの」は、日曜日だが、地域の人手不足から児童も作業に駆り出されたということ。地域から少なくない出征者を出したということか。

第一二二首「ひま」は、戦闘機を飛ばすためにヒマシ油を採る植物。「蓖麻を栽培しよう」と大政翼賛会がポスターで呼びかけていた。空地の開墾は、食糧増産や蓖麻の育成などを目的に奨励された。

第一二五首と第一二八首の「桑の皮」は、繊維の原料。皮の収量が地域に割り当てられ、また、近隣へ収量の多さを誇るため、皮むきは一家の夜なべ仕事となり、地域での競争ともなり、「かたき」であったということ。

〈109、111、112、116、117、118、119、121、123、126、127、129、130〉

以上の一三作品は、出征と戦死がその内容。

第一〇九首、第一一一首、第一一八首の三作品は、これから入営或いは戦地へと出征していく父と勇士。作者は、第一〇九首が秋田県、第一一一首が東京都、第一一八首が山形県。各地から父や勇士が出征し、児童はその見送りの列にいたということ。

第一一二首、第一一六首、第一一七首、第一二一首、第一二三首、第一二七首、第一二九首の七作品は、何れも戦死が含まれている。

第一一二首の「元帥」は、五月二十一日に戦死が公表された山本五十六元帥。一億の全国民がその仇を討つ決意だということ。

第一一六首では兄が戦死し、第一二一首では第二四半期でのアッツ島の玉砕、第一二三首、第一二七首、第一二九首の「南海」は、南洋のソロモン諸島ガダルカナル。昭和十七年八月十八日、ガダルカナル島に上陸した一木支隊は、同二十一日に戦闘で全滅とのこと。その後の支援作戦も失敗し、十八年二月一日からガダルカナル島からの撤退を開始し、大本営は二月九日にガダルカナル島からの撤退を「他方面に転進」と発表。「南海」には、膨大な数の戦死者がいたということ。

第一一九首「朝まだき」は、「兄の武運を祈る老母の姿」を詠んでいるが、それは作者自身も神に祈ったということ。

第一二六首「前線の勇士の」展覧会を見ての作詠であり、第一三〇首「前線の兵隊さんに」は、前者が埼玉県、後者が東京都と離れてはいるものの、「前線の」苦労を偲び、「白百合の花」の香りも姿も届けたいとの思いが詠み込まれたが、後者は四年生の作品であり、歌意、歌語とも見事な作品といえよう。

一方、第三四半期の「短歌」は、「企画作品」の掲載はなかったものの、「投稿作品」が七九作品であり、そのうち「戦時下」の内容をもつ作品が二九作品あるものの、残りの五〇作品は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

・野も山も若葉さしけり岡の上につつぢは赤き初夏の夕暮

（福島県小名浜高女一、七月十六日・金、第二一一九号）

・雨晴れて庭に干されし傘の上赤きとんぼのゐ並びにけり

（静岡県菅山校六年男子、七月二十一日・水、第二一二三号）

「野も山も」は、初夏の若葉が野に山に満ち、丘の上に見える「つつぢ」は赤く夕日に照り映えている。明日も天気は良さそうだ。

「雨晴れて」干している傘はどんな色だろうか。「赤きとんぼ」も羽を乾かしているのだろうか。

・朝顔が咲きて日の出の間近なり東の空は色あざやかに

（新潟県四谷校北校舎六年男子、八月六日・金、第二一三七号）

・水泳につかれし手足休めつつしばし眺むる夏の大空

（群馬県館林南校六年男子、八月二十九日・日、第二一五七号）

「朝顔が」の作者は、日の出前に起床して朝顔を咲いているのを見、東の空の明けるのを見ている。夏休みにしても、早い起床だ。

「水泳に」も夏休みということだろう。「つかれし手足」は冷たくもなっていよう。夏の日差しは眩くも暖かだ。

・朝風にゆらゆら動く松の影ふと見上ぐれば雲の流るる

（東京都武蔵野第三校六年男子、九月十五日・水、第二一七一号）

・大空に湧き立つ白き雲の嶺くづれむとしては盛り上りつつ

（茨城県小田校高一男子、九月十九日・日、第二一七五号）

「朝風に」の作者は、地面の松の影が揺らぐ不思議に目を上げて空を見ると、風に雲が流されていた。上空は風が吹いていて、影が動いている理由が分かった。

「大空に」も雲を眺める作者がいたということ。「大空に湧き立つ白き雲」は入道雲か。見ている間に形を変えて見せる。夏の雲が踊っていた。

児童を取り巻く自然は、児童とともに生き生きとしていた。

以上、第三四半期における「短歌」を検討してきたが、この第三四半期での投稿作品は、掲載数では、四つの四半期では二番目に多いもの、掲載作品にみられる「戦時下」の掲載作品数が最も少ない四番目であり、掲載率も約三六・七％と四番目であった。

また、新聞社による特集もなく、企画作品の掲載は見られなかった。詠歌着想の動機や作詠時期と投稿、そして掲載との経過は明らかにできないが、この第三四半期での「戦時下」を内容とする作品の掲載数と率が高くないということが児童の「戦時下」が生きやすいものであっ

たということにはならない。

このことは、「戦時下」の内容をもつ作品二九作品のうち、肉親や地域からの出征と戦死、「南海」の戦況による戦死、山本五十六元帥、アッツ島玉砕の戦死などの作品が一三作品、すなわち「戦時下」の内容をもつ作品の約四四・八を占めるところとなっていることが児童の「戦時下」の状況を示していることになろう。

五　昭和十八年第四四半期の「短歌」

第四四半期（十月～十二月）に掲載された「投稿作品」は六六作品。この内、「戦時下」の内容をもつ作品は、次の四三作品であり、掲載率は約六五・二％。

また、第四四半期での「企画作品」の掲載は一五作品。このうち「戦時下」の内容をもつ作品は一二作品。

従って、第四四半期に掲載された「短歌」八一作品の内「戦時下」の内容をもつ作品は五五作品であり、掲載率は約六七・九％。

以下、「投稿作品」における「戦時下」の内容をもつ作品四三作品を検討するが、第三四半期を引き継いで整理番号を付す。

131　窓とほく通る戦車をひたむきに見つめてゐたり志願兵の友
（岩手県盛岡市盛岡校高一男子、十月一日・金、第二一八五号）

132　降る雨のはげしく屋根をうつ音に兄の便りのスコール思ふ
（静岡県町屋原校四年男子、十月二十日・水、第二二〇一号）

133　白雲をぬひてとびかふ戦闘機御国の守り我等もたたむ
（東京都師範附属校五年男子、同前）

134　父上は麦の成績こまごまといくさの兄にたよりおくれり
（北海道名寄校五年女子、同前）

135　独立の旗かかげけりビルマ国雄々しく進めわれらと共に
（新潟県岩室西校高一男子、同前）

136　前線の兵隊さんの御武運を祈りに参る霧の朝かな
（埼玉県秩父第二校高二男子、十月二十四日・日、第二二〇五号）

137　秋空に乱舞つづける赤とんぼ荒鷲のごと見ゆあこがれ心に
（岩手県赤碕校高二男子、同前）

138　国のため自分のために防空がう一心にほつてゐるなり
（東京都荒川区第二峡田校六年男子、十月二十七日・水、第二二〇七号）

139　静座中そつと目をあけ級訓を見ればがまんと書いてあるなり
（群馬県館林南校六年男子、同前）

140　兄ちゃんにとつてもらつた柿の実が今年もいつぱい夕日に赤い
（神奈川県田名校三年女子、同前）

141　振袖の人形さんもはや変りへうじん服にもんぺをはいてる
（振袖は仮名。北海道名寄校五年女子、十一月三日・水、第二二一三号）

142　友の父ビルマの空に華と散りてけふは御魂の凱旋の日なり
（東京都武蔵野第三校六年女子、同前）

143　やすらかに布団の上にねるごとに勇士のことを思ひみるなり
（布団は仮名。東京都金華校四年男子、十一月五日・金、第二二一五号）

144　黄金の波わけ進む稲刈りの勝ち抜く誓ひ口づさみつつ
（福島県永田校六年男子、同前）

145　園芸に肌くろぐろとやけたるを戦時色なりと母笑みたまふ
（東京都武蔵野第三校四年男子、十一月十日・水、第二二一九号）

146　鉄棒にとびつききつと空見れば白雲のなか飛行機がとぶ
（東京都荒川区第二峡田校六年男子、同前）

147　幼子の歌ふ軍歌ぞ勇ましきみな日の丸の小旗かざして
（神奈川県横浜市大岡校五年男子、十一月十七日・水、第二二三五号）

148　秋風に僕の作つた飛行機が一番高く光りつつとぶ
（神奈川県横須賀市浦郷校六年男子、同前）

149　大勝の佳節ことほぎ大輪の花もたわわな菊活けまつる
（岩手県飯岡第一校高二男子、同前）

150　報道の声ははずみて大戦果歴史に残る今日の喜び

（東京都誠之校六年女子、同前）

151 出征の勇士あるらし木枯に遠くきこえる歓呼の人声
（岩手県盛岡市盛岡校高一男子、十一月十九日・金、第二二二七号）

152 みちのくの山野はもえて戦勝の祈りおろがむ社頭の親子
（前作と同じ作者、同前）

153 急降下機上の人もよく見えて万歳さけぶ教室の窓
（群馬県館林南校六年男子、同前）

154 街かどに千人針をこひてあり日はうららかに応召勇士の母
（秋田県西馬音内校高一女子、十一月二十六日・金、第二二三三号）

155 白い菊黄色い菊の咲いてゐる学級園に麦の種まく
（茨城県吉沼校三年女子、十二月一日・水、第二二三七号）

156 朝来ても休み時間も帰る時も学級園をみんなでのぞく
（前作と同じ作者の二首め、同前）

157 誰やらが叫んだ声に来てみればばんざい出たぞ青い麦の芽
（前作と同じ作者の三首め、同前）

158 南洋にあがる戦果にこたへんと寒き朝にもこたつやめたり
（岩手県大槌校六年男子、十二月三日・金、第二二三九号）

159 指揮官機鬼神も泣かむ体当り大和男子ぞ我もならはむ
（東京都芳水校六年男子、同前）

160 あな尊と南の海に散りたまふ海のつはものにいのり捧ぐる
（東京都芳水校六年女子、同前）

161 大君の御楯となりて国守るけふは銃とる出陣学徒
（東京都誠之校六年女子、十二月十日・金、第二二四五号）

162 陽沈み港にありし輸送船うすもやに消ゆ煙いくすぢ
（神奈川県横浜市横浜第三中一年男子、同前）

163 南海に今ぞ輝くかちいくさ御稜威の光ただ有難き
（東京都芳水校六年男子、十二月十二日・日、第二二四七号）

164 大君の御楯となりし先輩に誓ふ決意は今ぞたぎり立つ
（東京都荒川区第二峡田校六年男子、同前）

165 とめどなく流れる涙を如何にせむ大詔下りし十二月八日
（東京都荒川区第二峡田校六年女子、十二月十五日・水、第二二四九号）

166 敵艦を沈めた夢見て勇みたつああ三度目の十二月八日
（東京都荒川区第二峡田校六年男子、同前）

167 軍神の霊にひびけと僕達が声はりあげて歌ふ「若鷲の歌」
（同前の在籍校・学年だが前作とは違う男子、同前）

168 敵のふね沈められても又来るな日本の戦果を知らないのだらう
（茨城県日立市駒王校三年男子、同前）

169 しんじゆわん攻げき隊の勇ましさ戦果は上るラジオはさけぶ
（同前の在籍校・学年だが前作とは違う男子、同前）

170 マルマルトフトツタ白の飼兎オクニヘアゲテオヤクニタテム
（白の飼兎は片仮名。山梨県大藤校一年男子、十二月十七日・金、第二二五一号）

171 召され行く勇士を送る雪道は真昼のやうに照りかがやきて
（北海道札幌市山鼻校六年女子、同前）

172 大戦果報ずるラジオ聞くせつな我が家は歓喜の声に満ちたり
（東京都芳水校六年女子、十二月二十六日・日、第二二五九号）

173 来年の堆肥を作る落葉を全校挙つて拾ふたのしさ
（秋田県西馬音内校高一男子、同前）

以下、内容的に類似する作品群ごとに、掲載順で検討する。

〈131、139、153、155、156、157、173〉

以上の七作品は、学校に纏わる作品。

第一三一首「窓とほく」は、遠くを走りゆく戦車を教室の窓から熱心に眺めている友は、「志願兵」だったという。「志願兵」とは、十四歳から十九歳の少年が二年間育成される「陸軍少年戦車兵学校」（昭和十四年十二月一日に陸軍少年戦車生徒隊として発足、昭和十六年十二月一日独立）への入学を希望しているということ。

第一五五・一五六・一五七の三首は同じ作者の作品。「学級園」には季節ごとに草花が植えられていたのであろうが、食糧増産の方針から麦畑へと転換し、種をまいた。種をまけば、その後の発芽が気がかりとなり、芽が出た時には「ばんざい」と喜んだ。食糧増産の実践ということ。

第一七三首「来年の」は、季節柄、全校の生徒総出で堆肥づくりの落葉かきということ。食糧増産のための楽しい作業となった。

〈132、134、135、136、140、142、151、152、154、160、161、164、171〉

以上の一三作品は、出征に纏わる作品。

第一三二首、第一三四首は、兄が出征中。前者が兄から、後者が兄への軍事便。

第一四〇首の「兄ちゃん」は、去年は家にいて柿を採ってくれたが、今年は居ないので柿を採ってもらえないとのことであろうが、居ない理由は明らかではない。時節柄、兄の不在を出征と考えておいた。

第一五四首「街かどに」は、出征する息子のための「千人針」で通行人に一刺しを乞う母を見てのこと。何時の日のことかは不明だが、掲載日の秋田は冬。「うららかに」晴れた日であることが救いだ。

出征時での「千人針」、出征後は第一五二首「みちのくの」地での神社参拝。家族の武運長久を願う「親子」は作者の知り合いか。

第一四二首「友の父」は、「ビルマの空」で戦死し、その「御魂」迎に作者は参列した。「少國民新聞」昭和十八年十一月十三日（土・第二二二二号）は、第一面で「ビルマ・インド国境の敵前線基地をもう爆撃」の見出しで、インパール飛行場への爆撃を掲載した。記事には日本軍の損害は記されていなかったが、「ビルマの空」に散った「友の父」もこの攻撃の一員であったか。

第一三五首は、大東亜共栄圏の構想にある「ビルマ」の独立を応援するもので、日本の出征には直接の関係性はないが、この作品が掲載されてほぼ二週間後に、ビルマに出征した友人の父の「御魂」迎えが掲載されたことから、ここで扱った。

第一六一首と第一六四首の「大君の御楯」となって出征するのが「出陣学徒」。学生・生徒の徴兵猶予が停止され、十月二十一日、文部省主催出陣学徒壮行会が、雨の降りしきる東京、明治神宮外苑陸上競技場で開かれた。学徒はそれぞれの故郷に帰って徴兵検査をうけ、陸軍は十二月一日、海軍は十二月十日に入営・入団した。

第一七一首、出征兵士の見送りは、児童の役割であり、天候に関わらず、雪道でも小旗を振った。

〈133、137、146、148、159、162〉

以上の六作品は、軍機軍船が詠み込まれているもの。

第一三七首「秋空に」は、陸軍の戦闘機「荒鷲」にあこがれている作者は、スイスイと自由に飛び回る「赤とんぼ」の飛行を「荒鷲」のようだと羨ましく眺めていた。

第一四八首「秋風に」は、「僕の作つた飛行機」、すなわち手作りの模型飛行機のことで、国民学校では、昭和十七年九月一日から、初等科から高等科までの全学年で模型飛行機づくりが教育課程に取り入れられた（『昭和』第六巻、講談社、平成二・一。一九三頁）。また、「少國民新聞」では、昭和十八年九月十九日（日・第二一七五号）、「国民の意気が大空に向かつて、ぐつとのび上る第四回航空日を記念する、本社並びに大日本飛行協会主催の全日本模型飛行機競技大会」の開催が掲載され、「けふ全国で模型機大会」と予報された。

第一五九首「指揮官機」が敵艦に体当り攻撃をして自爆したことは、「少國民新聞」昭和十八年十一月十日第一面（水・第二二一九号）の「第二次ブーゲンビル島沖航空戦」に掲載された。

この攻撃の先頭を切つた指揮官、納富健次郎大尉機は先頭を切つて突入、未帰還であります。また、去る五日の第一次ブーゲンビル島沖航空戦でも、指揮官清宮剛大尉は、同様に突入して未帰還

であります。

第一六二首の作者の在籍校は横浜第三中学。輸送船は機関を停止せずに停泊していたということ。

〈138、141、143、147、149、150、158、163、167、168、170、172〉

以上の一二作品は、作者の銃後での関心の在りかを内容とする。

第一三八首の作者の在籍校は、東京都荒川区。「防空がう」の設置に六年生男子が「一心にほつてゐる」とのこと。都心部の住宅密集地では防空壕の設置が始まっていたということか。

第一四一首は五年生女子の作品だが、「振袖の人形さん」にまで標準服にモンペ姿が及んだことに驚きを隠せないといったところか。昭和十八年八月三十一日、大日本婦人会東京都支部は、銀座などの繁華街で「決戦です！すぐ、お袖をきつて下さい！」とのカードを配布したとのこと。また、この年の一月には埼玉県の女子師範学校などで、スカートを廃止してモンペを制服と定めた。こうしたモンペへの移行が「振袖の人形さん」にまで及んだことの嘆きも、五年生ながら見られるところ。

第一四九首、第一五〇首、第一五八首、第一六三首、第一七二首に見られる「大戦果」とは、「少國民新聞」昭和十八年十一月十日第一面（前出）に掲載された「真珠湾以来の大戦果・第二次ブーゲンビル島沖航空戦」で伝えられた「大戦果」。この内容は、前日の九日十六時に大本営から発表されたもの。

第一六七首の「若鷲の歌」は、昭和十八年九月の東宝映画『決戦の大空』の主題歌で、西城八十作詞、古関裕而作曲。

第一七〇首、丸々と太った飼い兎を「オクニヘアゲテオヤクニタテム」と一年生男子は意気込むが、兎の毛皮は兵士の防寒服や飛行兵の耳当て、手袋などに利用され、「兎報国」として、大政翼賛会は家兎大増産報国運動を展開した。兎の世話は子供たちの役目だった。

〈144、145〉

この二作品は、勤労奉仕。第一四四首「黄金の」は、六年生男子が稲刈りをしている様子を詠んだもの。稲刈りをしているのは作者だけなのか、或いは多数でのことなのかは不明。「勝ち抜く誓ひ」の内容も分からないが、稲刈りが作者にとって当面の倒す相手ということか。

第一四五首で母は、日に焼けた肌を「戦時色なり」と作者に笑いながら差し出した。食糧増産のための園芸で黒々と日焼けしたということ。

〈165、166、169〉

以上の三作品は、十二月八日の「大詔奉戴日」を内容とする作品。何れも十二月十五日に掲載されているが、第一六五首と一六六首は同じ在籍校であり、在籍校での取り組みを投稿したということか。

なお、第四四半期での「企画作品」は、一五作品が掲載された。十月十三日（水・第二一九五号）には、秋田県横手校高等科二年女子東組による次の五作品が掲載された。

・草花をたむけて母は祈りけり忠誠尽くせし我が子思ひて
・ソロモンに屍すてし丈夫の墓地を清めて花たむけたり
・大君に命捧し軍人に心ささげて我等報いん
・南方の空海陸に華と散る若人偲ぶこの我われは
・遺家族に銃後の乙女心から感謝ささげてお墓掃除に

これは、掲載の前書きに、「国を護る将兵に感謝の真心を示すために、忠霊に捧げる歌をつくりました」とある。在籍校での取り組みを「少國民新聞」に送ってきたということ。

十一月十二日（金・第二二二一号）には、次の三作品が掲載された。

・我らみなこたへてはげまん南海にいさをを立てしわがますらをに
（我は仮名。東京都誠之校六年男子）
・身をもちて敵艦しづめし人ありとああ偉大なる大和魂

（同前、六年女子）

・銃とらぬわれも御民の一人ぞと鍬ふるうでに力こもれり

（静岡県山科校六年女子）

これらは、「戦果を讃へて」の総題で「綴方」や「詩」、「俳句」「書方」「図画」とともに掲載されたが、「敵艦隊の主力を粉みじんに打ちくだいた第一次、第二次ブーゲンビル島沖航空戦の大戦果」に喜び、感激して編集部に送られてきたものとのこと。前二作品の作者在籍校は東京都誠之校であり、同校からは、五、六年生の「詩」や「俳句」、「書方」「図画」など六人の作品が掲載されており、在籍校での取り組みであったといえよう。

十二月八日（水・第二二四三号）には、次の四作品が掲載された。

・出征の兄の留守をばまもりつつ三度迎へる十二月八日

（東京都第二峡田校六年女子）

・次々にあがる戦果に手を握る花瓶にさした菊がにほふよ

（同前、六年男子）

・教室にかざりし花も軍神のいさをの如くかをる今日かな

（同前、六年男子）

・ありがたき宣戦布告を胸にしめきつとやるぞと神に誓へり

（同前、六年女子）

これらは、「三度目の感激の日を迎へて」の総題で、「綴方」や「詩」「俳句」「書方」の作品とともに掲載された。「短歌」はこの四作品のみの掲載であり、同校からは「詩」に一作品も掲載されており、何れも、在籍校での取り組みということか。

十二月二十三日（木・第二二五六号）には、東京都幡代校六年女子による次の三作品が掲載された。

・寒菊の香りも高きこの佳き日日嗣の皇子はいや健かに

・日の皇子のみひかり燦とかがやきて世界中をばくまなく照さむ

・皇太子さまととせを迎ふこの佳き日我が日の本は広がりてゆく

これらは、「皇太子様を寿ぎ奉る」の総題で、「綴方」や「俳句」「書方」が掲載され、「短歌」はこの三作品のみが掲載され、同校からは、何れも六年生の「綴方」と「俳句」「書方」が掲載された。この企画作品が在籍校での取り組みによるものであるか、新聞社からの声掛けでもあったかは不明。

一方、第四四半期は、「企画作品」の一五作品のほか、「投稿作品」は六六作品であり、そのうち「戦時下」の内容をもつ作品が四三作品あるものの、残りの二三作品は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

・海上をすいすいとんで行くかもめ向かふの岩につづく白波

（長野県日野校六年女子、十月六日・水、第二一八九号）

・こほろぎの鳴く音のしげき夜の空の数へきれない星のまたたき

（岩手県大野校五年男子、同前）

・どどどどと波打ちぎはに寄せる波日本海の雄大さかな

（長野県日野校六年女子、十月二十日・水、第二二〇一号）

・疲れたと口にはいへぬ馬なればその汗ばんだ背をぬぐひやる

（宮城県仙台市西多賀校高二女子、十一月五日・金、第二二一五号）

・麦を蒔く畑の柿は色づきて夕陽を受けて輝きて見ゆ

（岩手県小山校高二男子、十二月十二日・日、第二二四七号）

「海上を」と「どどどどと」は、二人の長野県日野校六年女子の作品。前者は、海上を飛んでいくかもめを目で追って詠んだ作品であり、後者は、波打ち際打ち寄せる波の力強さに驚いた作品であり、両作品とも在籍校が長野県であることから、六年生の旅行であったか。

「こほろぎの」は、虫の音が無数にすだく秋の夜、見上げた空でも数えきれない星がまたたいているのを見たということ。耳と目が捉えた秋の夜ということ。「戦時下」でも、銃後は秋の夜ということ。

「疲れたと」は、馬の汗をぬぐい、しっかり働いてくれた馬を労わる。口のきけぬ馬だからこその感謝だという。家の飼い馬ということであろうが、馬への思いやり、心遣いが伝わってくる。

「麦を蒔く」は、柿の実が熟してきて、麦の蒔き時が近づいてきたことに思い至ったもの。実りの秋は、翌年の実りへの準備ということ。

この第四四半期、「戦時下」以外の内容の「短歌」作品には、学年での旅行があり、秋の夜の虫の音と星空があり、次の収穫への始動が詠み込まれていたということだ。

以上、第四四半期における「短歌」を検討してきたが、第四四半期での「投稿作品」は、掲載数では、この年の四半期では最も少なかったが、「戦時下」の内容をもつ作品の掲載数は第二四半期に次いで多く、四半期中で二番目の多さであった。

従って、掲載作品に占める「戦時下」の内容をもつ作品の掲載率は約六六・二％と、四半期中で一番多い掲載率であった。

また、「企画作品」の掲載数は一五と、四半期中で最も多く、第三四半期では掲載が無かったこと、第二四半期では三作品、第一四半期では四作品であり、これらと比べるとその突出感は否めないところだ。

六　昭和十八年「短歌」作品の概括

昭和十八年に掲載された「短歌」の「投稿作品」は三四一作品。この内、「戦時下」の内容をもつ作品は一一八作品。その掲載率は約三四・六％。

因みに、前年の昭和十七年は「投稿作品」二七二作品のうち、「戦時下」の内容をもつ作品は一一九作品（約四三・八％）であったから、昭和十八年の「短歌」の「投稿作品」の掲載数は、前年比で増加したものの、「戦時下」の内容をもつ作品の掲載数はほぼ同数であったので、掲載率では前年を下回るところとなった。

第一四半期の作者は、出征している兄へ増産のことを書き送り、下校時に、登校時にはなかった「入営の旗」を見たり、霜の朝、神社で出征兵士の武運長久を祈り、伊勢神宮で必勝も祈った。

第一四半期では、出征の見送りはなく、凱旋兵士の迎えがあり、戦勝を家族と、学友と喜んだ。季節柄から寒稽古にも励んだ。力を付けて「米英を倒すため」だった。作者にとっては、比較的穏やかな「戦時下」であったということになる。

第二四半期では、四月、「撃ちてし止まむ」の標語のもと米英を討ち果たさんとの意気であったが、五月、作者にとって、当然、国民にとって、「戦時下」は大きな衝撃をもたらした。その衝撃は、五月二十一日の山本五十六大将戦死の公表と同三十日のアッツ島守備隊玉砕の発表だった。作者たちは、山本大将の戦死と守備隊の玉砕を悼み、あとに続くと詠んだ。自宅では、父が、兄が出征し、応召間近の兄がいた。作者にとっては、厳しい「戦時下」に直面することなった。

第三四半期では、肉親や地域の出征と戦死、「南海」の戦況による戦死のほか、第二四半期での山本五十六大将（のち元帥）戦死、アッツ島玉砕の尾をひき、この第三四半期でも厳しい「戦時下」の状況を示していたということ。

第四四半期では、兄が出征中であり、十月には学徒出陣の壮行会があり、遠く木枯らしに乗って出征の歓呼が届いた。街では千人針を願う母親に出会い、雪道で出征を見送り、神社で武運と戦勝を祈り、友の父の御魂を迎えた。少年戦車兵に志願する級友がおり、敵艦に体当りした指揮官機があった。十一月、「真珠湾以来の大戦果・第二次ブーゲンビル島沖航空戦」が発表・報道され、歓喜の声に満ち満ちた。

また、「企画作品」には、十月に「忠霊に捧ぐ」、十一月に「戦果を讃へて」、十二月には「三度迎へるああ十二月八日」が掲載された。

つまり、第四四半期は、戦況と時節柄による「戦時下」が詠われたということになる。

この年、昭和十八年の「短歌」には、「投稿作品」と「企画作品」の、併せて三六三作品が掲載され、その内、「戦時下」の内容をもつ作品は一三五作品であり、その掲載率は約三七・二％となった。

つまり、これら以外の約六割の作品は、身の回りの出来事を、季節のうつろいを、それぞれの感性豊かに詠み込んだ作品であったが、約

四割の作品の内容には、山本五十六大将の戦死、アッツ島守備隊玉砕などがあり、児童にとっての「戦時下」は、より一層濃くなったと言えよう。

国のため自分のために防空がう
一心こめてほつてゐるなり

昭和十八年、防空壕を内容とするのはこの作品のみであるが、防空壕の穴掘りに一心を込めざるを得ない「戦時下」が到来したということである。

（二〇二〇・一一・二九）